

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月28日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520461

研究課題名（和文） 福井県安島方言の調査研究

研究課題名（英文） Research on the Antoh Dialect in Fukui Prefecture

研究代表者

新田 哲夫（NITTA Tetsuo）

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：90172725

研究成果の概要（和文）：

本研究では、福井県安島方言に見られる特異な重子音の研究、および風位語彙の体系について重点的に取り扱った。重子音については、その共時的・通時的な現象に関して、(1) 安島方言と標準語の対応関係を明らかにし、(2) 重子音の歴史的な変化を推定し、(3) 琉球宮古方言との類似性を指摘し、琉球語の歴史研究に寄与することを述べた。また、風位語彙については、「風の移ろい」という概念を導入することにより、風位語彙の内容を詳しく具現化できることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This research deals with the unique geminate sounds and the system of wind-direction words in Japanese dialects. Concerning the geminates, this research (1) illustrates the correspondence between the Antoh dialect and Standard Japanese, (2) investigates the historical development of these geminates, and (3) points out that the manifestation of the geminates in the Antoh dialect is similar to that in the Miyako dialect in the Ryukuan Language. On the wind-direction words used by fishermen in Hokuriku district, the principle and the function of the words are precisely described by introducing a concept of “wind-shift” and the unique embodied sense of wind orientation fishermen have.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：日本語学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：安島方言、重子音、音変化、宮古八重山方言、風位語彙、アクセント

1. 研究開始当初の背景

安島は福井県北部の海岸沿い、東尋坊から約4km離れた人口1020人（2008年4月現

在）の集落である。安島方言の言語学的な重要性はこれまで全く指摘されていなかった。ただ、安島ほか周辺地域においては、安島は

変わった方言が話されていることで夙に有名であり、その特異性は住民には認識されていた。しかし、これまで中空清三郎氏の語彙集をのぞいて、言語学的な記述がなく、学界においてほとんど知られることはなかった。おそらく『日本言語地図』や『方言文法全国地図』の調査地点から漏れていたことが、見過ごされた主たる原因と思われる。しかしながら、本研究の代表者の準備的調査によって、この方言の特異性の一部が明らかになった。特に音韻に関しては、本土方言では比類無き現象が見られる。この方言の特徴的な重子音に関して、標準語との対応関係と歴史変化の推定の概略を示したが、不十分なものであった。今後、文法や語彙の記述的研究の進展によっては、新たに発見された「言語島」である可能性がきわめて高くなった。この方言の特徴をもつ“純粋な”話し手は高齢化しており、徹底した記述と保存が急務である。この状況は現在も変わりはない。

2. 研究の目的

本研究は次のような目的でなされた。

- (1) 安島（あんとう）方言に現れる言語現象を記述する。すなわち、音韻、アクセント、文法の主な事項に関して、網羅的な記述調査を行う。
- (2) 音韻現象に関して、成立した歴史的なプロセスを解明する。すなわち、得られた資料から史的な解明を行うとともに、類似の音韻現象をもつ琉球方言と比較対照することで、音変化の一般的な方向性の探究を行う。
- (3) 特徴ある言語現象の消失するプロセスを解明する。すなわち、特異な言語特徴を持つものは高齢層のみである。世代別調査を行い、言語特徴の保存状態を把握し、また消失の実態とそのプロセスを明らかにする。
- (4) 保存のためのデジタル化した言語資料

を作成する。消滅の危機にあるこれらの現象の音声と動画データ、談話資料、漁業従事者（女性の多くが海女で高齢化している）の生活誌に関連する語彙集を作成する。

3. 研究の方法

(1) 安島とその周辺方言の記述調査

安島と周辺部の文法の記述調査を行った。文法については、『全国方言文法地図』Vol. 1-6の項目で概要を知り、調査項目を策定し、調査を実施、安島方言の特殊性を確定した。アクセントについては、安島の他に、近隣の越前町小樟、福井市蒲生の調査を行った。これらの方言では、N型的な特徴がでるかどうかが重要であるので、助詞連続を含む調査項目を準備した。また調査語彙を増加し、複合語規則を探り、アクセント規則全体の解明に努めた。

(2) 安島集落内の世代別調査

安島方言の特異性の保存状態と集落での共通語化がどの程度進んでいるかを知るために、老年層、壮年層を中心とした世代別調査を実施した。

(3) 方言語彙集ための資料収集

風位語彙を詳しく調査し、その他に、魚名・海草・海女漁法などの漁業生活誌語彙、語彙記述を行った。中空氏の語彙他、『日本言語地図』Vol. 1-6、平山輝男編の基礎語彙を参考にして語彙調査を実施した。

(4) 音声資料

世代別調査、語彙調査にともない、音声資料の収録を行った。音声は項目ごとに検索に便利のようにWAVファイルで切り出しを行った。

4. 研究成果

本研究では、福井県安島方言に見られる特異な重子音の研究、風位語彙の体系、アクセ

ントの研究に関して重要な成果が得られた。また、安島方言との差異を見るために、周辺地域の方言を調査したが、そこでも今まで報告になかった発見があった。

(1) 重子音研究

安島方言の重子音は、**maffa**《枕》の語例のように、標準語の**kura**に対応して、**ffa**が現れる。これらの重子音の共時的・通時的な現象に関して、安島方言と標準語の対応関係を明らかにし、重子音の歴史的な変化を推定した。また琉球語宮古方言との類似性を指摘し、琉球語の歴史研究に寄与することを述べた。

まず、重子音が現れる環境を整理、その上で、日本本土方言で類似の現象が現れる方言と比較を行った。さらに、この重子音の成立のプロセスを推定した。すなわち、**kura**のような音連続は、まず、**r>w**の変化が起き、**kuwa**に変化したのち、**uwa>wa**の縮約が起きた。その際、子音の代償延長によって、**kkwa**が生じ、そのあと、**kkw**が唇音化を保存したまま摩擦音化して一気に**ffa**が生じたと推定した。

安島方言の重子音と類似の対応関係を持つ方言に琉球語宮古八重山方言がある。これらの方言と安島の現れ方を比較した。検討の結果、琉球語宮古八重山方言の重子音は、安島方言とは異なるプロセスで成立し、奇しくも同じ結果をえるに至ったことが明らかになった。しかしながら、安島で推定した変化のプロセスは、琉球語を考える際にも重要な示唆を与えることを指摘した。すなわち、安島方言の重子音の研究は、一つの方言に限定した従来の研究から脱し、音変化の一般性の研究に寄与する成果をあげた。

(2) 風位語彙研究

語彙研究のうち、風位語彙に関しては、安島方言の他に近隣の小樟方言などで調査を

実施した。特に小樟方言において非常に豊かな風位語彙が見られた。そして、その衰退については、漁船の動力化の普及が大いに関わることが明らかになった。

また「風の移ろい」という概念を導入することにより、漁師がもつ風位語彙の内容を詳しく具現化できることを明らかにした。この「風の移ろい」という概念は、同じ風の状態でも、どの風から移ろってその状態に至ったのかを問題にするもので、もとの状態が異なれば、同じ風の名前にも異なる名前が与えられることを述べた。この「風の移ろい」は、これまでの風位語彙研究では指摘されていなかった視点で、今後この種の研究には、欠くべからざる要素であることが明らかになった。

(3) アクセント研究

安島方言のアクセントにはゆれがみられて、この方言の名詞のアクセント体系を確定するまでには至らなかった。しかし動詞アクセントについては、明確に少なくとも2つの区別が見られた。

しかしながら、近隣の小樟方言では、明確な3型アクセント体系を有していることが明らかになった。これまで、名詞単独や1拍の助詞付きの文節（「川」、「川が」など）しか調べられていなかったため、先行研究では2型あるいは曖昧な特殊アクセントの地域とされてきた。この研究では、助詞連続（「川にも」「川からも」など）を含む項目を選定し、そこに上野善道のいう「文節化」「系列化」というN型アクセントの特徴が見られることを明きからにした。

この方言が3型アクセントであるという発見は、これまで方言アクセントのタイプ別分布地図を書き換えるものであった。すなわち、3型アクセントは琉球や島根県隠岐諸島など限定した地域に分布し、またその東端は隠岐

と言われていたが、福井県越前地方にも3型アクセントが分布していることがわかったのである。

動詞アクセントについても3型の様相を呈し、中央式アクセントと極めてよく対応することがわかったが、成立に関わる具体的なプロセスについては、不明な点が多い。その通時的なプロセスの解明は、今後の研究の課題である。

(4) 世代別研究

世代別調査で、世代間で唇歯音 ff から両唇音へ変化したという重要な発見があったが、それら全体のデータの公開には至っていない。安島方言の世代別研究については、調査結果の一部入力や音声の切り出し作業を行ったものの、公開が遅れている。今後のデータの整理とまとめが残された課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① 新田哲夫 「福井県越前町小樟方言のアクセント」『音声研究』(査読有), 16-1, 2012年, pp. 63-79

② 新田哲夫 「福井県三国町安島方言の maffa 《枕》等の重子音について」『音声研究』(査読有), 15-1, 2011年, pp. 6-16

<http://ci.nii.ac.jp/naid/110008712313>

[学会発表] (計2件)

① 新田哲夫・中井幸比古 「アクセントの式の中和—中央式アクセントと垂井式アクセントの中間アクセント—」日本言語学会第145回大会, 2012年11月25日, 九州大学箱崎キャンパス (福岡県)

② 真木啓生・新田哲夫 「福井県越前地方の風

位語彙」第92回日本方言研究会研究発表会, 2010年5月27日, 甲南大学 (兵庫県)

[図書] (計2件)

① 新田哲夫 「越前海岸の方言—音声特徴と風位語彙—」(科学研究費補助金報告書) 2013年3月, pp. 41

② 松森晶子・新田哲夫・木部暢子・中井幸比古, 三省堂, 『日本語アクセント入門』, 2012年, pp. 182-221

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新田 哲夫 (NITTA Tetsuo)

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号: 90172725

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

下地理則 (SHIMOJI Michinori)

九州大学・人文科学研究院・准教授

研究者番号: 80570621